

Mucinous phenotype and CD10 expression of primary adenocarcinoma of the small intestine

熊谷, 玲子

<https://doi.org/10.15017/1654981>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



(別紙様式2)

氏 名	熊谷 玲子			
論 文 名	Mucinous phenotype and CD10 expression of primary adenocarcinoma of the small intestine			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	田口 智章
	副 査	九州大学	教授	岩城 徹
	副 査	九州大学	教授	橋爪 誠

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

目的：原発性小腸癌における形質発現、臨床病理学的特徴、遺伝子変異およびマイクロサテライト不安定性(以下、MSI)の関係を明らかにする。

方法：1975-2005年の間に、当教室で原発性小腸癌と診断された47例を研究対象とした。臨床病理学的事項(年齢、性別、腫瘍径、肉眼型、組織形態学的分類、深達度、静脈浸潤、リンパ管侵襲、リンパ節転移)を見直し、MUC5AC、MUC6、MUC2、CD10およびミスマッチ修復(以下、MMR)タンパク(MLH1、MSH2)について免疫組織化学染色を行った。KRAS遺伝子とBRAF遺伝子の変異、MSIについて解析した。

結果：症例は男性29人、女性18人で、平均年齢は59.9歳(23-87歳)であった。腫瘍発生部位は、十二指腸14例(30%)、空腸21例(45%)、回腸12例(25%)であった。形質発現については、MUC2陽性症例が20例(42.6%)、MUC5AC陽性症例が12例(25.5%)、MUC6陽性症例が4例(8.5%)、CD10陽性症例が7例(14.9%)であった。MUC2陰性症例と比較しMUC2陽性症例では、腫瘍径が有意に大きかった。腺腫成分を有する小腸癌3例はすべて、MUC2陽性であった。CD10陽性症例では、肉眼型が隆起型を示す割合が有意に高く、腫瘍径は有意に大きかった。MSIが解析可能であった34例において、高マイクロサテライト不安定性(以下、MSI-H)を呈した症例は4例であった。MUC2とMUC5ACが共に陽性となった4例のうち、3例(75%)はMSI-Hであり、また、3例(75%)は粘液癌であった。KRAS遺伝子変異は4例で認められた。KRAS変異のあった症例は全てMUC2のみ陽性で、MUC5AC、MUC6、CD10は陰性であった。

結論：これらの結果から、原発性小腸癌の形質発現は、生物学的悪性度、遺伝子変異およびMSIの状態と関連することが示唆される。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員により専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項につき種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。